

シリーズ・若者のひろば

— 若者たちの声のリレー —

スリランカワークキャンプを振り返って

ハン 真希



- ◆ 今回は、前橋市在住で「アクアポット」（おいしいお水の宅配）を運営し、アクティブに活躍している在日韓国人のすてきな若者の登場です。
- ◆ 韓真希さんは、この9月にNPO法人 good!のワークキャンプに参加してきました。good!とは、2001年から活動が続ける、若者のキッカケづくりを応援するNPO法人。国内外の様々な場所でボランティアワークキャンプを実施。参加者は延べ1000人を越えています。幅広い世代や経歴を持った若者、また不登校やひきこもりの経験者や人づき合いが苦手な若者も数多く参加しています。東京・池袋に程近い事務所は、若者が集まるフリースペース&共同生活寮になっているそうです。

ないないづくしのおうちでステイ

9月1日、AM4:00 前橋駅を出発。成田空港から香港、香港からバンコク、バンコクからコロンボ空港に到着した時には現地時間0:40（日本時間4:10）

翌日にはバスに乗り込み激しく揺られること12時間、最後は車も入れない細くてぼこぼした道を徒歩1時間半。そこがスリランカモナラガラタンバーナ村。私が訪れたセナラトゥナー家が住む村です。



バナナ畑の真ん中に一人通るのがやっと

のあぜ道が続き、その奥に広がる広大な敷地には土壁にレンガ屋根。ドアなし・窓なし・電気なし・ガスなし・水道なしの素敵なおうち。牛が10頭、猫が一匹、巨大なトカゲやカエル、見たこともない虫たちが一緒に暮していました。

そのおうちで緊張しながらも私を興味津々で迎えてくれたのがタッタ（お父さん）、アンマ（お母さん）、アイエーシャ（11歳娘）、ネットウミー（5歳娘）、ナウオッディア（3歳娘）でした。

深く関われる旅がしたい

私とこの家族との出逢いはこの日から3ヶ月前、「スリランカへ行きたい」と思っていたことがきっかけで始まりました。ただ行くのでは面白くない。深く関われる旅がしたい…と旅好きな仲間に連絡をしました。そこで紹介されたのがNPO法人 goodのワークキャンプ。ホームページに入ってみると面白いキャッチコピーが目飛び込んできました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

(抜粋) 学校では教えてくれないこと、勉強以外から学ぶこと、そういったものの中に、本当に大切なものがあるのではないのでしょうか。

それは、人との出会いだったり、人と本音でぶつかって傷つくことだったり、大失敗をしてそこから学ぶことだったり……。誰かに教わったのではなく、体で、肌で感じたこと。そういったものが、いつか、絶望から這い上がる力となり、新しいことに挑戦する原動力となると思うのです。

若いうちに視野を広げること、自分のフトコロを深くすることは、人生を豊かにすることです。そして、本当の意味で人生を楽しめる人間が増えれば、日本も、そして世界もよくなっていくのではないかと、私たちは考えています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

…若いという程、若くもない私 34 歳ですが、この団体の趣旨もとても気に入ってしまいました。早速説明会に参加してこの旅行に申し込みました。

仕事に追われる日々にスリランカについての予習も、旅行の計画や下調べもないままバスに乗り込み、気がつく私とスリランカの家族 6 人。言葉も通じないまま真っ暗闇の中、蠟燭の灯りひとつを頼りに右手でカレーを食べていました。



水浴びや洗濯は乾季で枯れた川を掘れば水はじんわりながら湧き出て来ました。地

面に深く穴を掘れば立派なトイレになりました。小腹が空いたら道端のバナナやマンゴー、見たこともない果物で満たします。お隣の家まで徒歩 30 分をかけて遊びに行くと、何度でも「テーボム (お茶飲みなさい)」となります。私の知っているシンハラ語は 10 個程、会話が續かない沈黙の時間もスリランカの人には外国人と過ごす特別な時間。私の頭のとっぺんから足の先までららんとした視線にさらされ続けました。気を使っている様子は全くなく、ただただ嬉しそうな人達。見ているこちらも自然と幸せな気持ちになりました。

村の保育園作り



さて、15 日間のキャンプ期間中、最も大切なのは村の保育園作りでした。一緒に参加した総勢 19 名の大学生達と力を合わせて鍬を振り、土や石を運び、コンクリートを積んでいきました。日本の大学生にとっては生まれて初めての重労働。手にはまめができ、力を合わせて働くことの意味をそれぞれが感じていたようでした。

私にとっては自分自身のきっかけ作りという概念とは少し違った興味がありました。企画者の意図と参加者の変化の観察です。企画者の代表は発展途上国という言葉に違和感がある。ここにはこの暮らしがあると言っていました。ではなぜスリランカなのか？ どうして若者にワークキャンプを体験させるのか？ 目的は何なのか？ 継続出来る力は何なのか？

支援や奉仕とは違う「気づきあいの世界」

村での生活にはその全ての答えがありました。スリランカ人と日本人キャンパーの素直さが相互に作用して、支援や奉仕とは少し違う気づき合いの世界。あくまで主人公はそれぞれが「私自身」であること。自主性の成長でした。

村の人にとっても村をもっと良くするための努力や意識付け、個人の向上心へ繋がるきっかけであり、日本人キャンパーにとっても自分自身を包み隠さず曝け出し「生きるとは？幸せとは？」を問い続ける日々となりました。

私たちはつい、非日常的な世界に飛び込めば自分が変わるのではないかという錯覚に陥ります。そして進んだ技術は人の価値を上げ社会を幸せにするのだと、そのひとつひとつがなくては生きてはいけないと思ひ込みます。

ホームステイ期間は深く村の生活に触れて、村の完成された循環社会を見ることができました。それは貧しさや不幸ではなく間違いなく穏やかな日常であり幸福でした。

世界に特別なものなどそもそもなく、私を感じる非日常は他の誰かの日常で溢れていました。地域として文化的な面を除き「自」と「他」が同じなのだと思えた時、「自分自身抱える問題」も「他者の中にあるそれ」もまた区切ることなく捉えられる可能性に気づきました。



保育園の前で（プレートには私達の名前が）

在日社会の問題をとらえかえす

例えば在日韓国人の問題として置き換えると、自己の中に抱えた複雑で答えのないプライドやコンプレックス、葛藤もまた誰かのそれと同じものだと考えることが出来ます。他を理解するために自分の環境があるのなら、その環境を自己完結型で終わらせてしまったらその価値観は大きく損なわれてしまいます。前回チベットを旅した時、目から鱗だった「在日だから理解できることがある」に加え「在日も少数派であることを主張する前に、他のみんなと同じだ」と認識する過程が必要なのだと思います。そして在日社会の問題を分離して考えるのではなく、その他の人と同様に与えられた選択肢とチャンスこそが大切なのだと思います。今回の大学生のように在日の若者たちも海外に出て、一緒に感じて、たくさんの人と出逢って欲しいと強く願います。



15日間はただただ楽しく、好奇心をくすぐられる時間でした。恥ずかしそうに声をかけてくれたこと、はち切れそうに満面に笑ってくれたこと、強く強く抱きしめてくれたこと、沢山の涙を流してくれたこと、「私」をただただ愛してくれたこと…スリランカの家族に心から感謝しています。

そしてこの素敵な旅に私を送ってくれた日本の家族、会社にも。紹介してくれた方々にもそして good さんに心から感謝します。ボホマ ストゥーティー。ありがとうございました。